

エレベーターのドアが開く。その向こう側はいきなり、非日常、ハレの世界が広がっていた。そろいの衣装に身を包んだメイドさんたち。一斉に声がかかる。「お帰りなさいませ、ご主人様」。50代おじさん記者、秋葉原メイドカフェ初体験のルポである。

「メイドカフェに行ってみませんか」。ラジオN I K K E Iの番組スタッフから声が掛かったのは2週間ほど前。定期出演している「ラジオiNEWS」の5月ゲストが、アイドル歌手で現役のメイドさんでもある「あっとせぶんていーん」のろきていさん、らめさん、くるみさんなので、彼女たちのホームグラウンドを垣間見してみようという趣旨だった。

正直、最初は気後れした。あまりに場違いだと思ったからだ。若い世代、特におタクと呼ばれる暗めの男たちが、じとっとたむろしている。そんなイメージを持っていた。実際に足を運ぶと、認識は一変した。明るい照明、軽やかな音楽、若い男性だけでなく、女子高校生も、筆者と同年代やそれより上のシニアもいる。外国人観光客も珍しくない。どの客も表情が柔らかい。メイドカフェ、それは大都会の真ん中にある、日常と切り離されたハレの世界そのものだった。

客がやってくる。普通のカフェなら「いらっしゃいませ」だろうが、ここでは「お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様」だ。それも10人近いメイドさんたちが声を揃えてだ。なんという非日常感。メニューをみる。ここでも非日常感は満載だ。オムライス「ぴぴよぴよ♪ひよこさんライス」、フルーツパフェは「永遠の17歳になるろりっこサンデー」だ。料理や飲み物が届くが、すぐに手をつけてはいけない。メイドさんと一緒においしくなる魔法の呪文を唱えるのだ。恥ずかしい。とても家族や同僚には見せられない。それでも不思議なもので、非日常的な空間に身を置くうちに慣れてしまったのか、メイドさんの呪文の言葉を素直に復唱する自分がいた。

やがてショーが始まる。それまで横でお給仕をしていたメイドさんたちが、スポットライトを浴びて、歌い、踊り出す。お客の手には支給されたペンライト。メイドカフェはたちまちコンサートホールになった。1曲でぱっと終わるのがいい。次はメイドさんたちとの撮影タイムだ。名前を呼ばれた客が次々ステージにあがる。メイドさんと並んでインスタント写真を1枚。おじさんも女子高生も外国人も、みんな実に幸せそうな顔でカメラに収まる。

我々のテーブルにろきていさんがにこやかにやってくる。ラジオ N I K K E のスタジオより堂々として、大きく見える。彼女がこの仕事に誇りを持っていることが、立ち振る舞いの随所々ににじみ出る。外国人観光客が急増しているので、メイドさんたちは英語はもちろん、北京語も自在にあやつる。たいしたものだ。

意外といっては失礼だが、出された料理はおいしく、メイドさんたちの歌もうまかった。滞在時間約60分。日常のトラブルやプレッシャー、会社や家庭での肩書、役割をしばし忘れ、メイドさんたちの醸し出す不思議な非日常な空間に身も心も委ねる。行く前は「人生最初で最後のメイドカフェだろう」と思っていたが、今の心境は。「また行きたいな」。

(取材・文：日本経済新聞社 編集委員 鈴木 亮)